

間一髪の事態を表す <副詞句＋主節>

曾我 祐典
(元 関西学院大学)

本発表で取り上げるのは、過去においてももう少しで現実になるところだった事態（間一髪の手態）を表す <副詞句＋主節> の発話である。これまで文法書や論考があつてきたのは (1), (2) のように半過去形を用いる場合のみのようにだが、実は (3), (4) のように大過去形を用いることもある。

- (1) Une minute plus tard, le train <déraillait>.
- (2) Mais tu es fou de m'avoir bouscule ainsi ! Un peu plus, je <tombais>.
- (3) Dix secondes de plus, l'avion <avait franchi> la frontière.
- (4) Le vent soufflait, c'était terrible. Les tuiles volaient partout. C'était la tempête. Un peu plus fort, j'<avais perdu> ma maison.

(1), (2) のような半過去形の発話については部分照応説にもとづく Berthonneau & Kleiber (2003, 2006) や未完了性を説明の鍵とする渡邊 (2007, 2014) など優れた論考があるが、それらとは異なる立場から、(1)-(4) のような発話が (5) のような操作の産物であることを示したい。

- (5) a. 発話者は、過去のなんらかの手態 S を踏まえている。S のある過去スペースにいる気持ちになり、S に対してわずかな差異 D のある反実の手態 P を思い描いて、D を副詞句で表すことによって喚起する。
b. そして、P のある反実 P スペースにいる気持ちになり、そこに条件 P の帰結として確かにある手態として Q を思い描いて主節によって表す（事行の非完了／完了に応じて 半過去形／大過去形を用いる）。

この (5) から、帰結 Q の反実性は反実 P スペースにある手態であることに由来し、切迫感条件 P が S に対してわずかな差異 D しかなく、Q のモダリティが「確定」であることに由来すると説明できることになる。